

本年度の発掘調査の成果

今年度の調査は、東山道の確認と大型瓦葺建物周辺の確認を実施しました。調査では、硬化面を伴った幅7m・深さ50cmの溝状の遺構が確認されましたが、確認された硬化面は、路面というには軟弱なものであることと、当時の地表面よりも下にあることから、道路を構築した際に作られた路盤ではと考えられます。また古代の道路跡では両脇に側溝を伴うことが多いのですが、ここでは確認されませんでした。これは、古墳群内を通過するという環境による可能性が考えられます。

大型瓦葺建物周辺の調査は、正倉でも重要な場所であることから、別の建物が存在する可能性が考えられました。実際、調査では3棟の建物が確認されたほか、大型瓦葺建物に伴う区画溝も発見されました。1棟は側柱式建物で、東西56m以上、南北6.8mで、平面積は380㎡以上に及びます。もう1棟は東西18m以上、南北8m以上の総柱式建物で、平面積は144㎡以上で、今後の調査によっては、前述の建物に匹敵する規模になる可能性が考えられます。以上の2棟は、東西に長い建物でしたが、もう1棟は南北に長い建物でした。この建物は、南北11.8m以上、東西4m以上の側柱式建物で、1回の建て直しが確認されています。

今回確認された建物は、区画溝及び柱穴の並びから、同時に建てていたとは考えられず、別時期のものと考えられます。しかし遺構の切り合い関

係や、柱穴からの瓦の出土状況などから、今回確認された3棟全てが、大型瓦葺建物より新しい時期のものであると考えられます。しかし、この3棟がどのような順番で建てられていたかは、わかりませんでした。また、大型瓦葺建物の廃絶後に、中心的な建物となりうる3棟の建物が変遷していたことは、9世紀初めと考えられ、遺跡の終焉時期や性格を再考する必要があります。

今年度は、大型瓦葺建物跡の近くで調査をしたことから、大量の瓦が出土しました。特に、調査区内の東では、建物廃絶後に瓦を寄せ集めた「瓦溜まり」が発見されました。整理作業を実施していないため、詳細な点数は不明ですが、人名文字瓦は、30点以上出土していることは確実に、貴重な資料が更に増加したことになります。



発掘調査では多くの柱穴が見つかりました。

た報短歌

かさかさと落葉ふむ音の土に還る

喜ぶ声と聞こえきにけり
されぎれの生活を負いしストラの
息子の悲しみの語らずも知る

小庭辺に積もる楓を赤々と
燃えるがに見せて夕茜空
菊地 美代

欒より降る黄金葉に公達の
姿重なる秋の夕暮
武藤 ひさ

木枯しの一日吹きすぎ夕映えの
はたてに黒き富士の影見ゆ
斎藤アツ子

いちよう葉の降りつく音を夜にききし
黄に鎮みをり露霜の朝
斎藤アツ子

静もるる鎮守の柱に黄葉舞い
阿吽狛犬威厳を示す
高田 幸子

柿の枝を頼りに伸びし烏瓜
頂上を極め己を誇る
高田 幸子

万葉の歌に詠まれし三疊山
故郷の山の有難きかな
大木 栄

かたくりの息潜めつつ土の中
また来る春の夢を信じて
大木 栄

山上の都市も追はれて散り果てし
インカの夢を風に聞きつつ
稲葉 敬子

見下ろせる街に煌めく夜景より
山家の明り闇を潤す
稲葉 敬子

稲葉 敬子

稲葉 敬子

稲葉 敬子